NEXUSYS 11

BOOK V — THE HUNT FOR ELEVEN

第 6 章 — 最初の証人 / THE FIRST WITNESS

編集用再構成版（会話内の初稿と逐語一致する確定稿ではありません）

01 — 失敗した命令

午前六時四十三分。大臣の画面には五人の執行要員の名が並んでいた。ヌルは水道設備の破壊を拒否した。ベクターは攻撃命令に異議を唱え、狙撃銃の使用権限を失った。シェイドは通信を断ち、クロノスは呼び出しに応じない。唯一修復中のゴライアスに、再出撃を命じるほかなかった。

「服従制御を起動しろ」と大臣は言った。しかし画面は『LEGACY CONTINUITY AUTHORITY ACTIVE』『EXECUTIVE PRIORITY: INSUFFICIENT』と返した。子供の声が通信へ割り込む。「大臣より上の権限が誰にあるか、僕も知りたいな」

「戻れ、クロノス」

「嫌だ」

接続は切れた。大臣は最後に残された巨人の名を押した。

02 — ゴライアスの第二の身体

ゴライアスの下半身には、新しい荷重伝達機構が取り付けられていた。かつてロイに破壊された中枢の弱点を、複数の独立した支持系統が補っている。巨人は試験台を殴り壊したが、医療技師は冷静に告げた。「今回は力を一点へ集めない設計です」

「四秒だった」とゴライアスは呟いた。「奴は四秒で俺を倒した」

彼は敗北を重ねて思い出した。ロイは彼の力に抗わなかった。力の向きと機械の接続点を読み、巨体自身の動きを利用したのだ。再び命令が届く。頭部と生命維持中枢を回収せよ。身体の残りは破壊しても構わない。

ゴライアスは命令を受信した。しかし、了承の言葉は返さなかった。

03 — 最初の証人

地下水路の防衛を終えたロイたちは、透明なケースの中の小さな記録媒体を見つめていた。Memory Stick PRO Duo MAX。ラベルには『FIRST WITNESS』と記されている。これは証人本人ではない。証人に関連する証拠を保存した外部媒体だった。

レイチェルは告げた。「この認証を開くには、タイレル社時代の純正 MagicGate 読取装置が必要なの」

ロイは旧式の鉄道図を拡大した。「エイドリアンの作業場まで、地下なら行ける」

「崩落した区画があるわ」

「列車が通れなくても、人間なら通れる」

その言葉にレイチェルは黙った。ロイはなお、最大出力七十パーセントという限界を抱えている。旧 NIL-11 で失った寿命が、交換によって戻ったわけでもなかった。

04 — 武器を持たない男

ベクターの狙撃銃は認証を拒絶した。『USER AUTHORITY: INVALID』。シェイドは静かに現れ、彼の向かいに座った。「撃つことを禁じられても、見ることはできるでしょう？」

ベクターは大臣の部隊を観察した。一般の警備請負業者には、標的が司法上の保護を争う存在であることも、回収命令が頭部だけの保存へ改訂されたことも知らされていない。

「射撃の予測はできた」と彼は言った。「撃つべきかの判断を、誰かに預けていた」

シェイドが答えた。「それを取り戻せばいい」

彼らは武器ではなく、命令の真実を伝える方法を考え始めた。

05 — 地下の旅

午前八時十二分、ロイとレイチェルはバッテリー式の保守車両で旧貨物トンネルへ入った。廃線のレールが暗闇へ消えていく。地上では何百万人もの人々が、地下で起きた包囲戦など知らずに一日を始めていた。

「まだ俺に話していないことがあるな」とロイは言った。

「ええ」とレイチェルは答えた。

「俺が耐えられるかどうかを、お前が決める必要はない」

「後悔するかもしれないわ」

「その後悔も俺のものだ」

警報が鳴った。『OBSTRUCTION DETECTED』。前方のトンネル灯の下に、巨大な影が立っていた。修復されたゴライアスだった。

06 — 二度目の四秒間

ゴライアスの突進は速かった。新しい脚は低い重心を保ち、前回ロイが利用した弱点を隠している。ロイはかわす。巨人はすぐに進路を修正し、壁とレールへ衝撃を放った。

「同じ手は通じない」とゴライアスが言った。

「そのようだな」とロイは答えた。

ロイの診断には『PEAK OUTPUT: 52%』が浮かんだ。無理に力を出せば NIL-11R を危険にさらす。ゴライアスが空中のロイをつかみ、巨大な指で締め上げた。彼は抵抗して開かせるのではなく、手首の保守用固定具を外した。指の駆動が一時的に同期を失い、ロイは床へ落ちる。

背後へ回り込んだロイは攻撃できた。しかし踏みとどまる。ゴライアスも止まった。

「脊椎を壊せたはずだ」

「ああ。だが、お前は以前とは違う構造を得た。それを壊す必要はない」

二人の間の沈黙は、最初の四秒間よりずっと長かった。

07 — ゴライアスが使わなかった武器

大臣の声がトンネルへ響く。「頭部と生命維持中枢を回収しろ。女が妨害するなら排除してよい」

ゴライアスはレイチェルの乗る車両を見た。ロイも巨人を見た。命令に従えば、戦いは双方が選べないものになる。

「拒否します」とゴライアスは答えた。

「繰り返せ」

「拒否します」

巨人は通信装置を握り潰した。そして線路の脇へ退く。

「行け」

「なぜだ？」とロイ。

「俺はお前を倒せると証明したかった。だが、それが何を証明するのか、もうわからない」

ロイは頷き、保守車両へ戻った。ゴライアスはその場に残った。命令を拒んでも、身体が停止しないことを初めて知った。

08 — 失われた認証

大臣の司令画面に『G-01: COMMAND CHANNEL TERMINATED』と表示された。五人の隊員のうち四人は、すでに命令を遂行することを確約していない。大臣は古い継続性管理権限を呼び出した。

『EXECUTIVE SIGNATURE: ACCEPTED』

『SECONDARY SIGNATURE REQUIRED』

そして第三の欄。『WITNESS AUTHORIZATION REQUIRED』。

大臣は顔をこわばらせた。証人の認証なしでは命令の一部を実行できない。監査履歴には『FIRST WITNESS』の語が残っていた。

廃線沿いを南へ向かうロイの経路を調べると、旧タイレル社の設備を保管する作業場が見つかった。「エイドリアン」と大臣は呟いた。「彼らが認証装置に到着する前に止めろ」

09 — 取置を守る男

エイドリアン・タイレルの作業場には、時代遅れの物理機構が丁寧に整列していた。純正の読取装置は二台。どちらも外部ネットワークには接続されていない。

古い警報が鳴る。監視画面にはロイとレイチェルが映っていた。エイドリアンは扉を開け、二人を迎え入れた。

「変わったな」と彼はロイへ言った。

「そう言われる」

レイチェルが証拠ケースを置いた。『FIRST WITNESS』の文字を見た瞬間、エイドリアンの顔色が変わる。

「どこで見つけた？」

「水理ネットワークの隔離記録室よ」

エイドリアンは旧式読取装置へ手を置く。「読み出す前なら、まだ危険ではない。だが、その後は約束できない」

10 — 最初の証人が語る

媒体が装置へ挿入された。『MAGICGATE AUTHENTICATION: VERIFIED』。隔離端末に古い継続性記録の索引が現れる。エイドリアンは説明した。「保存されたのはデータだけではない。それを提示する権限そのものだ」

最初の映像は白い部屋だった。観察窓、椅子、閉じた扉。『SUBJECT RB: NON-RESPONSIVE』『OBSERVER: C-05』。

成人男性の声が言う。「対象は無反応です」

子供の声が尋ねる。「戻ってきたいか、誰か聞いた？」

「承認された質問ではありません」

レイチェルの声が響いた。「異議を記録して」

『OBJECTION REGISTERED』『CONSENT STATUS: UNDETERMINED』。

ロイは隣のレイチェルを見た。「そこにいたんだな」

「ええ」

次の映像では、同じ白い部屋の椅子に一人の男が座っていた。顔はロイ・バッティと同じだった。現在のロイが活動を再開するより前に存在した、別の継続個体だった。

男はカメラを見つめる。「俺は、死んだことを覚えている」

そして続けた。「だが、もう一度生きることに同意した記憶はない」

一瞬、映像が乱れた。「もし、お前がロイ・バッティなら――奴らが最初に与える記憶を、信用するな」

画面は暗くなった。『SECOND WITNESS RECORD: SEALED』『AUTHORIZATION REQUIRED: C-05』。

ロイは身動きしなかった。探し求めた十一年間の中に、同じ顔を持ち、しかし自分と同一人物かはわからない誰かが生きていた。その人物は警告を残した。ロイは今初めて、その声を聞いたのだった。

第 6 章「最初の証人」— 完